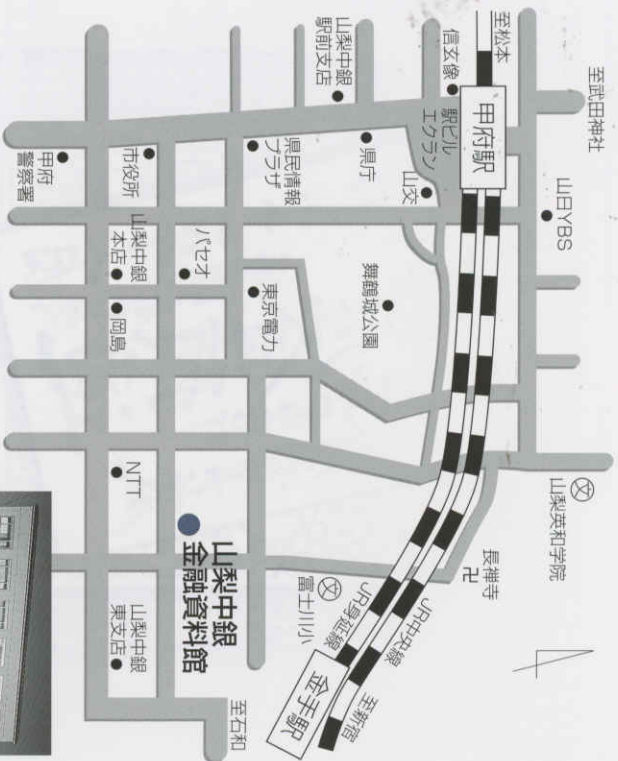


山梨中銀



金融資料館

山梨中銀 金融資料館



JR中央線甲府駅（南口）から徒歩15分
山梨中銀金融資料館

入館料：無料

開館日：日～木（但し祝日・12月29日～1月4日を除く）

開館時間：9時～16時（17時閉館）

所在地：〒400-0032 甲府市中央二丁目11番12号
TEL.(055)223-3090 FAX.(055)223-3091

ホームページ：<http://www.yamanashibank.co.jp/siryo.html>

山梨中央銀行

ごあいさつ



山梨中銀金融資料館は、山梨中央銀行創立50周年事業の一環として、平成4年7月に開設した金融関係資料の展示館です。

当館では、主として当行の歩みを中心とする歴史的文献と古代から今に至るまでの貨幣実物を展示しております。県内の銀行史を如実に物語る歴史的文献類は、いずれも当行の二度に亘る記念誌の編纂に際して収集した、かけがえのない貴重な資料です。

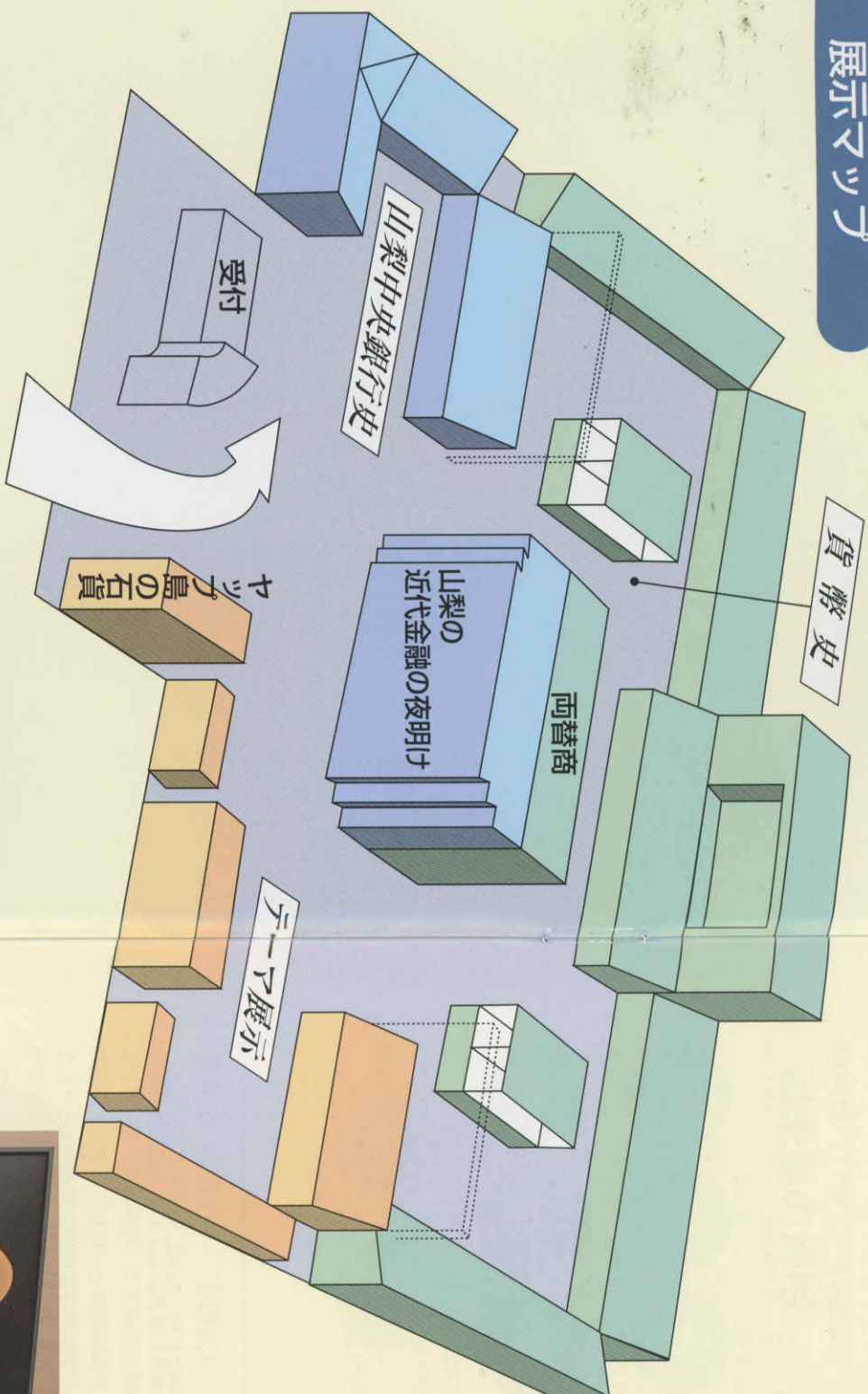
また貨幣は、当行が譲り受けた県下収集界の第一人者といわれた宮井幾三氏のコレクションを基に、その後、当行が収集した貨幣の中から、価値ある貴重なものばかりを選んで、体系的に展示いたしました。

この展示館が、県内金融とわが国通貨の変遷を理解されるうえで、皆さまのお役に立てれば幸いです。



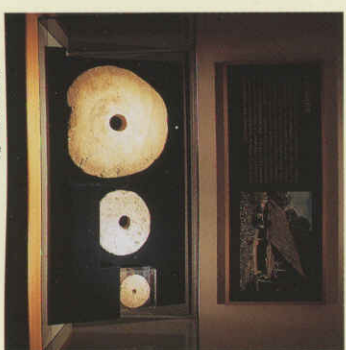
江戸時代の幣制のルーツは
甲斐武田氏の甲州金だった。

展示マップ



展示コーナー

- 山梨中央銀行史コーナー
- 貨幣史コーナー
- テーマ展示コーナー



ヤツタ島の石貨



展示施設風景

映像展示：「山梨の近代金融の夜明け」



●古代（紀元前～7世紀） 貨幣の始まり



大昔の人々は、物々交換によって、お互いに欲しいものを手に入れていました。

しかし、物々交換では、いつも両者の希望がうまく一致するとは限りません。

そこで、穀物や布、砂金、貝殻、玉といった、誰もが欲しがり、しかも分けたり計ったり、運搬や保管するのに便利な品物が交換の仲立ちとして、利用されるようになりました。これが物品貨幣または現物貨幣といわれるものです。

やがて、物品貨幣のなかでも、とくに優れた性質を持つ金、銀、銅が広く使われるようになり、紀元前8世紀ころになると、中国や小アジアなどで、これらの金属を使った貨幣が造られるようになりました。

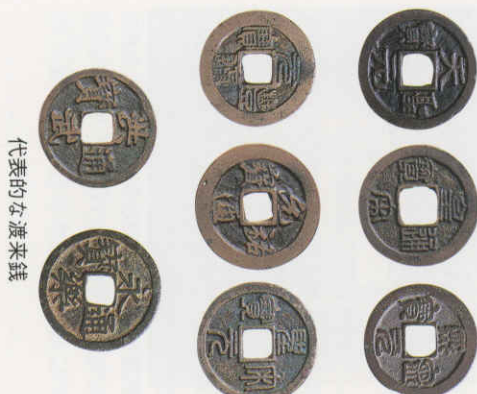
●古代（8世紀～12世紀） わが国初の貨幣



わが国最初の貨幣は、和銅元年（708年）に铸造された和同開珎といわれています。中国の進んだ文化や制度を積極的に取入れようとした朝廷は、唐の開元通宝を手本として、この貨幣を造りました。以後、250年の間に、12種類の貨幣を発行しましたが、これをまとめて皇朝十二銭といえます。貨幣は、初めはなかなか普及しなかったため、朝廷は貨幣を貯めた者に冠位を与えたり、役人の給与を貨幣で払うなどとして、貨幣の流通に努めました。

しかし、この皇朝銭は改鑄のたびに銭貨の質を低下させたり、新銭1と旧銭10を交換したことなどから、やがて民衆の間に銭離れが起こり、10世紀末には皇朝銭の鑄造が停止され、再び銅などの物品貨幣が使われるようになりました。

●中世（12世紀～15世紀） 渡来銭の使用

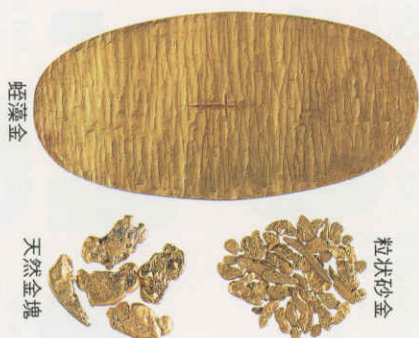


平安時代も末期（12世紀ごろ）になると、農業や手工業の発達を背景に交易が盛んになり、それに伴って貨幣の需要が急速に高まってきました。しかし、すでに皇朝銭は発行が停止されていたため、主に日宋貿易を通じて流入した中国銭（宋銭）が、わが国の貨幣として使用されるようになりました。日宋貿易では、わが国は砂金、水銀、硫黄などを輸出し、代わりに大量の宋銭を輸入したのです。

宋銭は、鎌倉時代にも引き続き幕府公認の貨幣として使用されましたが、続く室町時代には、主に明銭も大量に輸入されています。ところが、それでもなお銭貨が不足したため、渡来銭を真似て鑄造した私鑄銭（ひてせん 偽銭）が大量に造られました。

こうした状態は、江戸時代の初頭まで続きました。

●近世（15世紀～16世紀） 戦国武将と金銀貨幣

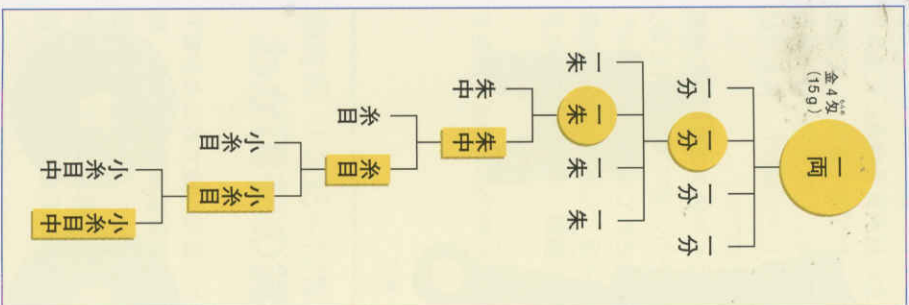


戦国時代に入ると、各地の諸大名による城下町の建設や楽市などの商業振興策によって、商工業が飛躍的に発達しました。その結果、高額貨幣の需要が増大し、諸大名によって金銀貨が鑄造され、渡来銭に並存して流通するようになりました。

また、金銀は軍資金としても重要視されたため、諸大名はこぞって金銀山の開発に努め、方々で鉱山の争奪戦を繰り広げるようになりました。

こうして金・銀の生産は、最盛期を迎え、多くの金・銀貨が造られていきましたが、これらの殆どは、いずれもその重量によって、交換価値が算出される秤量貨幣でした。

●近世（15世紀～16世紀） 武田氏の幣制—甲州金



戦国諸大名によって造られた各種の金銀貨が秤量貨幣であつたのに対して、甲州金は7段階におよぶ量目体系に基づいて造られた計数貨幣でした。

しかし、甲州金も古くは、碯石金や延金などの秤量貨幣で、その後、鑄造や秤量の技術が進歩するに伴って、次第に計数貨幣化していったものと考えられています。

武田氏滅亡（天正10年）の後、徳川家康は、甲斐の完備した民政方式とともに、この優れた甲州金の制度を、江戸幣制の中に取り入れました。また、甲州金を例外的な地方貨として、その後も甲州国内において通用させることを認めたのです。

甲州は、フオッサングナや中央構造線という地質構造をもち、その周辺地域において、金の鉱脈に恵まれていました。

ここから採掘した金によって甲州金制度が確立したのですが、甲州金山は、信玄時代に最も隆盛を極めたといわれます。

これらの金山の経営にあたっていた金山衆とよばれた人々は、城攻めにも参加し、鉱山技術を生かして城の石垣を崩したり、井戸を濁水させて兵糧攻めを成功に導くなど、多大な成果を挙げました。



●近世（17世紀～19世紀） 江戸時代の幣制

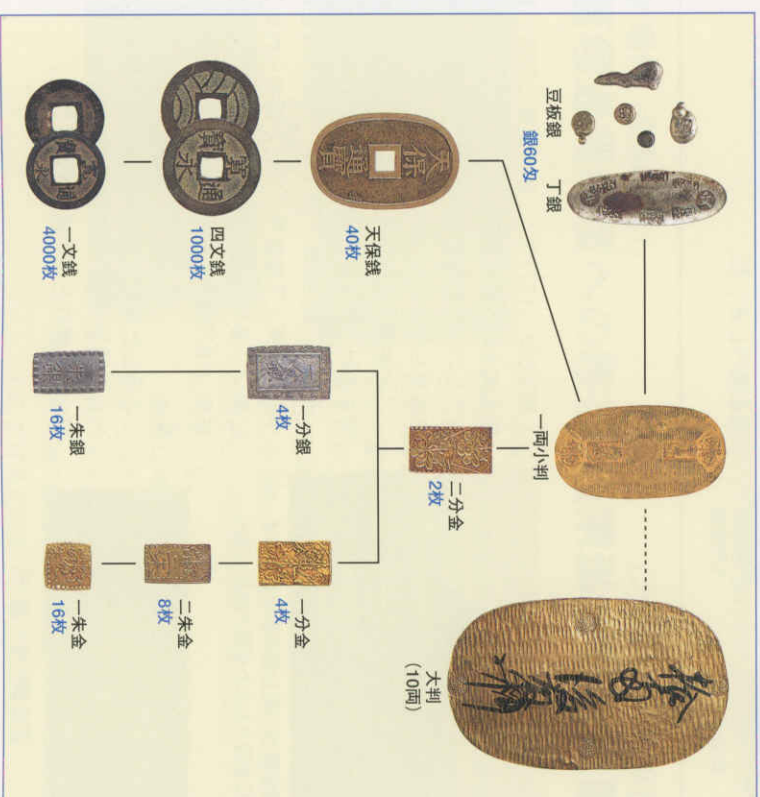


両替商 それぞれ貨幣の体系が違う金、銀、銭のスムーズな流通をはかるために生まれたのが両替商でした。

関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は、翌慶長6年（1601年）には金銀貨の鑄造を開始しました。金貨は、四進法の貨幣単位を持つ計数貨幣でした。一方、銀貨は丁銀、豆板銀と呼ばれる秤量貨幣でした。

このように性質の異なる金貨と銀貨を併用したのは、関東では早くから金が流通していたのに対し、関西では古くから銀を量って通貨としてきた伝統があつたためでした。

また、寛永13年（1636年）には銅銭（寛永通宝）の鑄造も始まり、ここに金貨、銀貨、銅貨の“ぜに、カネ”の3種からなる三貨制が採られることになりました。



●近現代（明治年代） 幣制の混乱と円の誕生



太政官札

民部省札

20円金貨

明治通宝

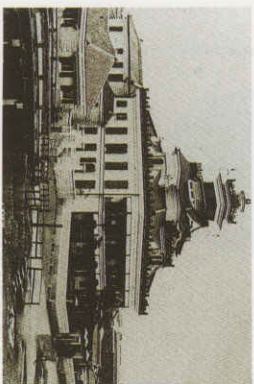
1円銀貨

わが国の近代化を急務とする明治政府にとって、幣制の整備は差し迫った課題でした。しかし、当初は通貨制度を整備するゆとりはなく、旧幕藩時代の金銀銭貨や藩札などをそのまま通用させる一方、自らも両・分・朱単位の太政官札や民部省札などを発行し、さらには民間の為替会社にも紙幣を発行させるといった状態で、幣制は混乱を極めたのです。

政府は明治4年（1871年）新貨条例を制定し、金1.5gを1円とした近代洋式製法による新貨幣を発行して、近代的な貨幣制度を確立しました。円の誕生です。

そして、明治5年、幣制統一の手始めとして、藩札や金札などを整理する目的を以て、明治通宝を発行しました。

●近現代（明治年代） 国立銀行と紙幣発行



第一国立銀行 国立銀行条例に基づき、明治6年に創設されたわが国で最初の銀行。

明治5年（1872年）、政府紙幣の回収と殖産興業資金の供給を目的として、アメリカのナショナルバンク制度に倣った国立銀行条例が制定されました。

この条例に基づいて、当初4行の国立銀行が設立され、国立銀行紙幣が発行されました。

その後、明治9年（1876年）の条例改正によって、事実上不換紙幣の発行が認められたことに伴い、多くの国立銀行が設立され、明治12年末（1879年）には153行を数えるに至りました。

こうした中で、当行の前身である第十国立銀行も、明治10年（1877年）4月に、全国で9番目の国立銀行として設立されました。



国立銀行券・旧1円

●近現代（明治年代） 日本銀行の設立



日本銀行兌換銀券



日本銀行兌換券

明治10年（1877年）の西南戦争の勃発に伴って、戦費調達のために政府紙幣や国立銀行紙幣が増発されたことなどから、激しいインフレーションが発生しました。

これは、厳しい財政緊縮と紙幣の回収整理によって収束されましたが、その過程で、兌換銀行券の一元的な発行によって紙幣の乱発を回避し、通貨価値の安定を図ることの必要性が認識され、明治15年（1882年）、中央銀行として日本銀行が設立されました。

日本銀行券は、明治18年（1885年）に銀貨と引換えのできる兌換銀券として、初めて発行されました。ついで、明治30年（1897年）金本位制が採用され、金0.75gを1円とする貨幣法が制定されたことに伴い、金貨と引換えのできる日本銀行兌換券が発行されました。

●近現代（昭和初期） 管理通貨制度への移行



不換紙幣10円



不換紙幣1円

金本位制の下では、日本銀行が発行できる銀行券の総額は、保有する金の範囲内と定められていました。しかし、昭和に入り、軍費を中心に資金需要が急増したため、日本銀行が保有する金の量を超えて銀行券を発行する必要が出てきました。

昭和6年（1931年）、イギリスが金本位制を離脱したため、わが国も同年12月に金の輸出を禁止し、日本銀行券の兌換は原則として停止されました。

昭和16年（1941年）には、金の保有量に制約されることがなく、銀行券が発行できるようになり、その翌年の日本銀行法の制定により法律上も兌換の義務がなくなつて、わが国は名実ともに管理通貨制度へと移行しました。

山梨の殖産興業を担った興益社

当行のルーツは、明治7年（1874年）6月に開業した「興益社」です。

6年に山梨へ着任した藤村県令は、着任直後から並々ならぬ情熱を傾けて、殖産興業や教育制度の確立など、諸施策を強力に推し進めていきました。殖産興業を奨励するためには、金融の道を開くことが不可欠と考えた藤村県令は、その時、願ってもない一人の人物を得たのです。県庁定詰区長であった栗原信近でした。藤村県令の意を受けて、栗原信近は出資者を求めて県下をくまなく奔走し、大変な苦労の末、興益社を開業させるに至ったのです。



栗原信近

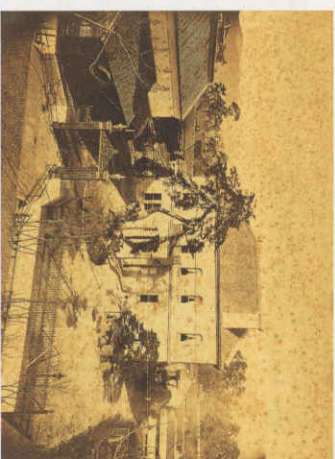
興益社は、明治8年（1875年）には第一国立銀行とコルシエ契約を結んで為替業務を開始し、翌9年には山梨県為替方（官公金の取扱機関）となりました。

また、注目すべきは、9年に取扱いを開始した「興産金」と称する貯蓄金の受け入れです。これが、わが国で初めて取扱われた貯蓄預金です。

第十国立銀行の発展

明治9年（1876年）の国立銀行条例の改正は、資本金や紙幣発行の条件を大幅に緩和しました。

草創期から国立銀行への転換を目指して、営業の基礎を固め、内外に信用を確立してきた興益社にとって、この改正は待望久しいものでした。明治10年4月15日、わが国9番目の国立銀行として「第十国立銀行」が誕生しました。



創業当時の本店

国立銀行は、資本金の80%の紙幣を発行できるという特殊業務がありました。これにより当行は、最終的に20万円の紙幣を発行しました。また、興益社時代に取扱いが開始された貯蓄預金や公金業務は、当行に引継がれて、ますます盛んになりました。

明治14年（1881年）に起こった松方デフレスは、経済を極度に疲弊させ、深刻な不況をもたらしましたが、当行は堅実経営でこれを乗り切つていきました。

その後、23年に起こった資本主義恐慌にも、当行は全く動揺することなく、順調な進展を示し、預金銀行としての基礎を確立しました。

国立銀行紙幣の発行

当行は開業に際し、12万円の紙幣を発行しました。この時の紙幣は、米国で印刷された5種類（1・2・5・10・20円）の旧国立銀行紙幣と呼ばれるものでした。その後、明治11年に8万円の紙幣を追加発行しましたが、その紙幣は、国内で製造した1円・5円の新様式紙幣でした。

これによって、当行の発行紙幣総額は、20万円となりました。



第十国立銀行券 旧1万円



第十国立銀行券 新1万円

わが国初の貯蓄預金の取扱い

明治8年（1875年）、政府は郵便貯金の法を設けて、現在の郵便貯金を開始しましたが、民間では全く扱いはありませんでした。興益社の栗原社長は、少額でも糾合すれば産業資金になり得ることに着目して、9年に貯蓄預金「興産金」の取扱いを開始しました。

これが当行に引継がれて、わが国で初めて貯蓄預金を取扱った銀行となりました。

また、13年12月には「貯蓄預金之説明」と題する小冊子を作成し、長野県の南信地方にまで配付しています。

当館に「興産金預り通」という初期の貯金通帳が展示されていますが、わが国で最も古い貯金通帳といわれています。



興産金預り通



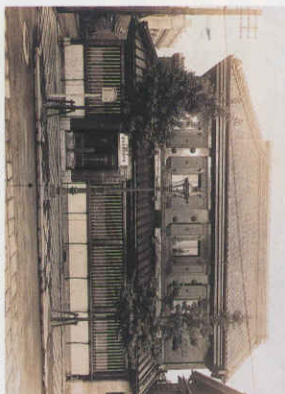
貯蓄預金之説明

第十銀行への改組

明治30年（1897年）、当行は国立銀行満期前特別処分法によって「第十銀行」に改組し、私立銀行として歩み始めました。

しかし、第十銀行時代のわか国は、幾度かの恐慌、戦乱、震災などが相次いで起こり、大きく揺れ動いた時代でした。とくに、大正末期から昭和初期にかけては、不況に次ぐ不況の日々が続き、金融界はかつてない激動の時代を経験することとなったのです。こうした中に多くの銀行が、その渦中に消えていきました。

当行は、創業以来保ち続けてきた堅実経営の姿勢を貫いて、この困難を乗り越えていきました。



土蔵造りの東京支店 東京支店の現在地にあったこの店舗は、関東大震災により焼失しました。

戦時下に誕生した山梨中央銀行

昭和16年12月1日、国の要請によって、第十・有信の二大銀行が合併し、「山梨中央銀行」が誕生しました。

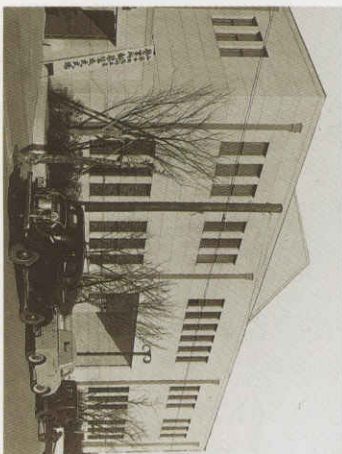
この新銀行の発足から、わずか一週間後の12月8日、わが国は太平洋戦争に突入しました。新たな歩みを始めたばかりの当行にとって、その前途は、極めて厳しいものとなりました。

その後、戦災、敗戦の苦難の時代を乗り越え、戦後の復興から高度成長の時代を経て、郷土の発展とともに今日まで歩み続けております。



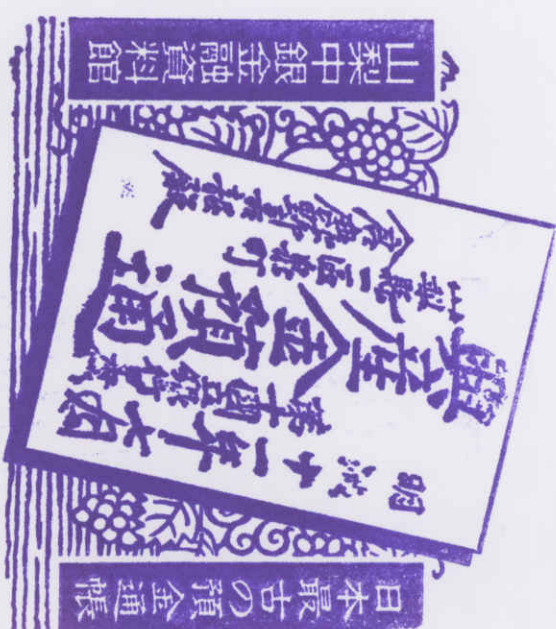
合併を報ずる新聞記事 昭和16年8月31日

「山梨日日新聞」



焼け跡に復旧した本店 戦後の復興に立ち上げる人々の大きな励みとなりました。

ご来館記念スタンプ



YAMANASHI CHUO BANK
FINANCIAL MUSEUM

ご来館日

